

〈新刊紹介〉

## 程麻・林振江著 林光江・古市雅子訳 石川好監修 日本橋報社 『李徳全——日中国交正常化の「黄金のクサビ」を打ち込んだ中国人女性』

(中国研究所顧問) 武吉 次朗

63年前、中華人民共和国最初の代表団が日本を訪問し、熱狂的ともいえる歓迎の渦を巻き起こした。本書は、その中国紅十字総会代表団の団長を務めた李徳全女史の人柄と訪日の模様を振り返った好著である。

評者は1954年当時、まだ中国で働いていたので、日本での歓迎の渦を体験することはできなかったけれども、ラジオニュースと人民日報が連日大きく報道したことを覚えている。

本書は上下二編から構成されている。上編の「李徳全はじめの訪日、外交の表舞台へ」は、同団の来日を実現した経緯、訪問時の模様、訪日後の影響と、同団の通訳を務めた王効賢女史らへのインタビューが含まれている。また下編の「李徳全と馮玉祥」は、李・馮夫妻とキリスト教、同夫妻と国民党、そして衛生・慈善事業の総責任者として李女史が果たした役割が述べられている。

李徳全(1896~1972)は、米国の教会によって中国で初めて創設された女子大学である華北協和女子大学を卒業し、北京YWCA総幹事を務めた後、「クリスチャン・ゼネラル」として知られる馮玉祥と結婚した。良妻賢母の李徳全は、馮の先妻が遺した5人の子どもを、自分が産んだ5人の子どもとともに育て上げた。夫妻は互いに尊敬しあい、平等で仲睦まじく過ごした。生活は質素で押し通した。

馮玉祥(1882~1948)は一兵士から軍人生活に入り、昇進を重ねるなかでキリスト教に帰依し、連隊長クラスの時に洗礼を受けた。後に数万を擁する軍団を率いたときには、軍内でもキリスト教信仰を広め、将校の8割以上が洗礼を受けるまでになったが、その後、孫文が北伐を発動したころ

には三民主義を信奉するようになった。馮はさらに、ソ連及び中国共産党と長年にわたり交流を保ち、蒋介石の反共内戦には旗幟鮮明に反対した。そして1948年夏に、中国共産党が発起した新政治協商会議に参加すべく、滞在先の米国から帰国の途中、客船の火災により不慮の死をとげた。負傷した李徳全はソ連で治療した後に帰国、翌年10月に成立した中華人民共和国政府では初代の衛生部長に就任、司法部長の史良とともに、非共産党員の女性閣僚として注目された。李徳全はまた、1904年に創設された中国紅十字会を中国紅十字総会に改組して、初代会長に選出された。

※ ※ ※

中国紅十字総会と日本との関わりは、1950年にモナコで開かれた赤十字社連盟理事会にさかのぼる。李会長が周恩来の指示により島津忠承日赤社長と接触し、中国に残っていた日本人の帰国について協力する意向を示した。1953年2月、中国紅十字総会と日本側の日赤等3団体が北京で会談をおこない、日本側が船腹を用意し、中国側が出国までに必要な旅費と食事宿泊費を負担することで合意した。中国紅十字総会の周到な協力を得て、1953年に2万数千人の日本人が無事帰国した。また往路の船には、日本で強制労働により亡くなった中国人の遺骨3,000余柱が送り届けられ、祖国の建設に参加する在日華僑2650人も搭乗した。

大部分の日本人の帰国が一段落した後、中国紅十字総会代表団の訪日を招請する決議が各都道府県議会などで相次ぎ採択され、1954年5月には衆参両院がそれぞれ全会一致で同様の決議を採択し、ついに8月には吉田内閣が同団の入国に同意するに至った。

このような動向には国民的な背景があった。朝鮮戦争の最中であった1952年、高良とみ等3人の国会議員が戦後初めて訪中し、第一次日中間貿易

協定に調印した。それ以来、日本人の訪中がしだいに増え、経済、文化のほか、政治家も相次ぎ北京を訪問するようになった。そこで周恩来は、民間交流の拡大を中日関係打開の方途ととらえ、「以民促官」(民間の力で政府を動かす)という方針を提起した。紅十字総会訪日団が中国側からの「第一球」になったわけである。

同団は李徳全を団長に、日本通で周恩来の信任厚い廖承志を副団長とし、8人の団員・随員には、後年の対日交流に足跡を残した趙安博、肖向前、呉学文、楊振亜、王効賢等を含んでいた。一行は1954年10月30日に来日、羽田空港でのスピーチで李徳全団長は「われわれのこの度の訪問は、両国民間の相互友好交流が新たな発展を迎えたことを表しています」と述べ、廖承志副団長は記者の質問を受けて魯迅の言葉を引用し、「もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になる」と語った。

同団はそれから11月12日までの滞在中、国民歓迎集会在3回(大阪の集会には3万人が参加)、座談会が16回、宴会と茶話会が17回、記者会見が13回開かれ、一行の動静は連日、各紙が大きく報道した。渡されたおみやげは1万点におよんだ。

同団が携えてきた最大の贈りものは、日本人戦犯1086名の名簿と40人の戦犯死亡者名簿だった。

一行は滞在中に、國務大臣2人を含む各界の人々と広く接触したほか、三笠宮崇仁殿下、高松宮妃殿下とも会見した。

「親しみやすいおばちゃん」という風貌で、聖母を思わせる穏やかな所作の李徳全女史と、江戸っ子顔負けの日本語で当意即妙に受け答えする廖承志。この絶妙のコンビが正副団長だったからこそ、「中共」に対する日本人のイメージを一新させ、熱狂的な歓迎を巻き起こしたと言えよう。

※ ※ ※

「礼は往來を尚ぶ<sup>たつと</sup>」と言うとおり、紅十字総会訪日団の実現により、日中民間の相互訪問拡大にはずみがつき、1954年から57年までの訪中は300団・3400人、訪日は30団・400人にのぼった。紅十字会団訪日の翌1955年には、中国商品展覧会が東京(参観者67万人)と大阪(同125万人)で開催されたし、翌1956年には日本商品展覧会が北京(参観者123万人)と上海(同165万人)で開催され、毛沢東はじめ中国首脳がこぞって訪れた。李徳全が名簿を持参した日本人戦犯は、1956年に大部分が不起訴となり、1956年から順次釈放され帰国した(有期懲役となった45人も刑期満了前に順次釈放され帰国した)。民間交流の分野は政界・経済界のほか文化芸術・スポーツ・学術・医学・報道・宗教・労組・青年・婦人・自治体から旧軍人にまで広がった。

同団が帰国後、中央に宛てた報告書には、「今回の訪日により、両国人民が往來を強める上でより多くの可能性を作り出し、広い道を切り開いた」とある。そのとおり、せせらぎがしだいに奔流に成長して強大な世論を形成し、政府に国交正常化を迫る力になっていったのである。

「以民促官」は日中交流の特色であり、伝統にもなっている。国交正常化45周年という節目の年あたり、その嚆矢ともなった中国紅十字総会訪日団の足跡を思い起こし、団長を務めた李徳全女史の遺徳を偲ぶことは、有意義であろう。

なお、本書に記載されている往時の写真が小さいうえ不鮮明なのが惜まれる。また、戦犯がソ連から中国に移された時期や、裁判で老女から非難された戦犯の人名と釈放時期など、細部に誤りが散見される。

(2017年9月刊、260ページ、本体1,800円+税)